

英語教育におけるEラーニングと今後の課題

青 木 由 香 里*
今 村 洋 美**

E-learning on English Education and Its Future Perspective

Yukari AOKI*
Hiromi IMAMURA**

1. はじめに

学習の時間帯や学習場所に関する制約を受けず、学習者が一人でも学べるEラーニング(Electronic-learning)が、大学を含む教育機関や企業においても盛んになっている。Eラーニングとは、様々な分野で、インターネットやイントラネットなどのコンピュータネットワークを使用して学習することである。このEラーニングは以前から、C B T (Computer-Based Training) やオンライン教育などと呼ばれていた。またアメリカの大学などでは、ディスタンスラーニング、オフキャンパススタディ、バーチャルラーニングとも呼ばれている。

Eラーニングが、学習者が一定のスケジュールにあわせて学校に行き、一斉に皆で同じ講義を受けるといった伝統的な学習様式と異なるのは、学習者が各自で選んだ場所(自宅など)で、学習者と先生の間が離れていても各自のスケジュールにあわせて学習できるという点であろう。従来の放送大学のようなテレビや衛星での授業やVTRによる学習もそれに似通うものであるが、Eラーニングとの大きな違いは双方向性に乏しいという点である。

主に米国では、企業が社員教育のためや、様々な大学やコミュニティカレッジが生涯教育や遠隔教育のために、Eラーニングを導入しているが、これからもこのEラーニングはまだまだ伸びると予想されている。島田(2000)でも、「盛り上がりを見せた“e-learning”」として、「今大会(ASTD: American Society for Training & Development/全米人材開発機構)で特に目についた

* 外国語教室・非常勤教師 (Part-time Lecturer)

**外国語教室 (Department of Foreign Languages)

のは、テクノロジーの進歩に伴い、インターネットやイントラネット等を使った教育“e-learning”が大きなテーマとなっていることだった。...EXPOでも数々の人材開発会社が“e-learning”プログラムを出展しており、その流れは今後ますます大きくなるだろう。」と指摘している。¹⁾ 大学や大学院においても、Eラーニングにより学位を取得することが可能となる場所が増えている。

日本でも、インターネット上での授業を遠隔地授業として認めるなど、文部省が2000年10月11日に大学設置基準など大学関連の省令を改正する方針を決め、海外向けにインターネットで授業を公開することや、ネット上で得た外国の大学の単位を日本の大学の単位とすることが認められることとなった。現在、大学審議会に諮られており、早ければ来春にはインターネットだけで授業を行う「バーチャル大学」が日本でも可能になる情勢となってきた。²⁾

本稿では、中部大学の英語の授業などで、いかに工夫してEラーニングを実践してきたかや、その過程で生じた問題点および今後英語教育にEラーニングを効果的に押し進めていくための課題などについて考察したい。

2. Eラーニングの定義と背景

Eラーニングテクノロジーの最先端を行くアメリカシスコ社は、Eラーニングについて次のように解説している。

E-learning is Internet-enabled learning. Components can include content delivery in multiple formats, management of the learning experience, and a networked community of learners, content developers and experts. E-learning provides faster learning at reduced costs, increased access to learning and clear accountability for all participants in the learning process. E-learning delivers accountability, accessibility, and opportunity. It allows people and organizations to keep up with changes in the global economy that now occurs on Internet time.

E-learning will be the great equalizer in the next century. By eliminating barriers of time, distance, and socio-economic status, individuals can now take charge of their own lifelong learning. ³⁾

また、EラーニングコンサルタントのStu Tanquist氏は、“Definition of e-learning (Eラーニングの定義)”を、“E-learning refers to anything delivered, enabled, or mediated by electronic technology for the explicit purpose of learning”⁴⁾としている。島田(2000)でも、Eラーニングを「インターネットやイントラネット等を使った教育⁵⁾」と説明している。これらの定義から、Eラーニングとは、「インターネットにより可能になる学習 (Internet-enabled learning)」であ

ると言える。Eラーニングの学習内容は様々で、安価に迅速に多くの人に学習の機会を与えることができる。また、リアルタイムで世界で起こる変化に対応することを可能とする。つまりEラーニングは、時間、距離、社会的、経済的地位などの壁を取り除き、個人が生涯学習することを可能にしている。水道の水がいつでもどこでもだれもが蛇口をひねれば出るように、学習者が無限の情報源から適切な情報を得ながら学習することを可能としている。

従来でも、同一空間内に教師と学習者が存在しない学習形態での学習者の意思的なコントロールによる学習は、放送大学のようなテレビや衛星での授業、FAXや郵便などを使った通信教育、VTRによる学習などとしてなされてきた。しかし冒頭でも述べたように、これらは双方向性に欠ける。Eラーニングはいつでもどこでも学習でき無限にある実際の世界の情報にアクセスできるが、これらの学習形態は十分とは言えない。また今までの伝統的学習スタイルでは、教師が情報や知識を学習者に伝授するというのが一般的であった。すなわち教師は抽象的な概念を具体的なイメージとして提示し、学習者はそれを受け止め解読し理解する。そして前の体験や知識に基づいてその新しい知識を積み立てて行く。これに対し、このインターネットを使用したEラーニングでは、情報や知識が一方向的に教えられるのではなく、学習者が学ぼうとする教材を自ら探し出し、教師や他の学習者と相互に交流し合いながら内的な知識を形成して行く理想的な学習形態と言えよう。

Eラーニングを英語教育に活用する利点として、

- 1) 時間や場所の制約を受けることなく、いつでもどこでも学習ができる
- 2) 学習者の動機や学習意欲を向上させることができる
- 3) 学習が個人化できる
- 4) 膨大な量の豊富な種類の情報へ容易にアクセスが可能で、しかも検索研究能力を養うことができる
- 5) リアルタイムで他の学習者とコミュニケーションができたり、相互学習により相手からのフィードバックがすぐに得られることで、外国語学習を促進させることができる
- 6) インターネット上で提供されている様々なマルチメディア教材を容易に活用することができる。例えば、有名な人物のスピーチやニュースを音声や動画で聞いたり見たりすることも可能であるし、最近では聴き取り練習に音声の使用なども可能である
- 7) 個々の学習者からも情報を発信することができる
- 8) 学習者に様々な言語をインプットすることもでき、特に興味の持てる読み物を選択できるという点において外国語への関心を高めることができる

などの点が考えられる。

次章では、これらの利点を生かして実際に我々が実践してきたEラーニングについて具体的に解説していきたい。

3. Eラーニングの実践

我々は、中部大学では「情報英語」の授業で、名古屋外国語大学では「総合英語」の授業で、主にインターネットを使用してEラーニングを実践してきた。学生は、週1度の大学の授業内では、教員の説明やサポートを受けながら教師作成のホームページに従い、課題に取り組んでいく。その後授業外にも、メディアラボなどのコンピュータが設置してある場所や自宅などで、ネットワークに随時アクセスしながら課題に取り組んでいく。そして、教師と密接に電子メールなどで連絡を取りアドバイスを受けながら学習を進めていった。

情報英語（平成12年度）

情報英語(2000)

お知らせ

- Show & Tellプロジェクト参加者に、アンケートがあります。お答えください。（12月18日）
- Show & Tellなどに使える中部大キャンパス素材写真集を公開しました。（11月8日）
- プロジェクト報告用掲示板を新しくしました。（10月13日）
- プロジェクト一覧を更新しました。（10月12日）
- 情報英語の授業を履修するのに必要なものを確認してください。
- パスワードを定期的に変更してください：パスワード変更方法の解説

授業のページへのリンク

- シラバス
- 担当教員から：それぞれの授業での教員からの指示は、共通ページ（このページ）の内容に優先します。
- 授業進行表：進度と授業内容の目安。全員必須。
- プロジェクト：個人ごと・グループごとに取り組むプロジェクト
 - プロジェクトの中間報告は報告用掲示板へ。
 - 2000年度前期に使用した古いプロジェクト掲示板はこちら。
- 作品：学生のみなさんの書いたもの
- 課題一覧：詳細は教員のページまたは口頭による指示に従ってください。
- 道具と補助教材

広場

- チャット室：練習用。期間限定かも。
- Q&A掲示板：授業に関すること、パソコンやインターネットに関することなど、気軽にどうぞ。回答も投稿してください。
- プロジェクト報告用掲示板：課題の提示やプロジェクトの進捗状況の報告などを投稿します。後期用に新しくしました。
 - 2000年度前期に投稿した発言や報告をご覧になりたい方は、前期掲示板をご覧ください。前期掲示板にはあらたな投稿はしないでください。

Shuji OZEKI;ozeki@intl.chubu.ac.jp

図1 「情報英語2000」のトップページ

<http://www.intl.chubu.ac.jp/gaikokugo/johoEigo2000/>

3.1 「情報英語」におけるEラーニングの実践

中部大学では、1996年度から全学科の2年次以上の学生を対象とした外国語科目の選択科目の1つとして「情報英語A, B」に取り組んでいる。授業は、学生用にMacintosh41台が設置された語学メディア教室で行われ、2000年度は6クラス（担当教員4名）開講され1クラス約20～40名が受講している。尾関修治氏が作成した「情報英語A, B」のホームページ（<http://www.intl.chubu.ac.jp/gaikokugo/johoEigo2000/>）上で提供される教材や様々なプロジェクトに、電子メールやメーリングリストなどを活用し、クラスや大学の枠を超えて学生が取り組んでいる（図1参照）。

この「情報英語」の主旨は、インターネットを活用し英語で情報を提供し獲得しながら、またそのために国内外の様々な人々と英語でコミュニケーションをしながら、コミュニケーション能力を育成し、同時にコミュニケーションの基礎となる語学の知識や専門的知識を習得していく動機付けとすることにある。すなわち、コンピュータスキルを身につけることなく、インターネットを利用して現実世界での生身の人間とのコミュニケーションを行うことにある。またこの授業では、インターネットというコンピュータとネットワークによって可能となり加速されつつある空間・時間的制約を越えた個人間のコミュニケーション方法を利用することで、世界各地の多様な人々と日常的に交流する能力を習得することを主眼としている。そのような実践的コミュニケーション活動の中で、他者を理解し自分を表現するためにいかに英語という共通語を使わねばならないか知ることを期待している。また、効果的なコミュニケーションのために電子辞書などの道具を利用したり、海外の情報サービスを直接利用することを学ぶことも目的としている。⁶⁾

受講学生たちは、教室内ネットワークの利用や電子辞書の使用、電子メールの使用、授業用メーリングリストへの投稿などについての導入教育の後、世界各地のWWW (World Wide Web) ページを探索し、印象深かったページについての短い紹介文を英文で授業用メーリングリストに流して他の学生に知らせる。情報をわかりやすく公開するためにどのような技法が使われているか観察し内容を整理する。将来自分自身のホームページを作成するために、どのようなテーマ設定をするか検討する。電子メールを利用して、学内および国内外各地の大学生と英文で交流し、語学力のみならず文化的相互理解を深める。また学生用News Group（電子掲示板）を利用して英文によるメッセージを交換し、教員による指導を受ける。さらにそれらを駆使して各自の英語運用能力や興味に合わせたプロジェクトをこなしてゆく。レポート提出をはじめ教員への質問や相談などは、電子メールや情報英語ホームページ上に作成された報告掲示板などを活用して行われる。

各種プロジェクトとして、慶応大学をはじめとした日本の大学や海外の大学と様々なテーマについてオンラインディスカッションをする「Interactive Writing Community on BBS Web Site」プロジェクト、「Key Palと電子メールで交流」プロジェクト、ロールプレイングゲーム型の「SaMOOrai」プロジェクト、日本の身近な風景やちょっと変わったものを写真で紹介し英語でクイズをだす「Japan Trivia Quiz」プロジェクト、日本の文化や日常生活を紹介する「日本紹介

メールマガジン」プロジェクト、興味のあるテーマを調べて個人のホームページを作成する「英文ホームページ作成」プロジェクト、などが用意され（「お好みプロジェクト」<http://www.intl.chubu.ac.jp/gaikokugo/johoEigo2000/projects.html> ）、学生は自分にふさわしいプロジェクトを見つけテーマを設定して取り組んでいく（図2参照）。そして、担当教員やプロジェクト担当者の指導のもと、個人またはグループで主体的に取り組んだ成果をWWWのページにまとめて公開していく。

What's New
お知らせ
Syllabus
シラバス
Announcement
担当教員から
Schedule
授業進行表
Projects
プロジェクト
Students' Work
作品
Assignment
レポート一覧
Tools and FAQs
道具と補足資料

お好みプロジェクト

趣旨

- 各自の英語運用能力や興味に合わせて各種のプロジェクトを用意したので、自分にふさわしいプロジェクトを見つけ、テーマを設定して取り組むことで、英語を実際のコミュニケーションや情報収集に利用する経験を積む。
- 読み物が好きな人、まとまった文章を書く人、プライベートな交流に興味のある人、気軽に英語でおしゃべりしたい人など、様々なジャンルのプロジェクトを用意したので、自分で選び、教員の指導のもと主体的に取り組む。

進め方

- 個人で、または共同でとりくむプロジェクトを決めて、プロジェクト担当教員にメールで申し込みする。その際、授業の担当教員にも同じメールを送る。（メールのTo:（宛先）にプロジェクト担当教員のアドレスを、Cc:（同報）に授業担当教員のアドレスを書き込む。）学籍番号、何曜日何限の授業を受講しているか明記すること。
- できるだけ複数のプロジェクトに取り組む。たとえば、ペンパルと交流する場合、相手の都合で進まなくなることもある。そのような場合にやるのがなくなってしまうように。
- いつ何をしたら手元に記録を取っておくこと。
- 英語の添削などの指導は授業担当教員に受ける。

プロジェクト報告用掲示板

- どのプロジェクトに着手したか、進行状況を掲示板に報告する。詳しくは掲示板で説明を読むこと。
- 掲示板の入り口はこちら。

プロジェクト一覧
（詳しくは各タイトルをクリックしてください。）

タイトル	担当者	概要
Interactive Writing Community on BBS Web Site	今村 imamura@intl.chubu.ac.jp	国内外の学生と一しよに、日本文化をはじめとする様々なテーマについてオンライン・ディスカッション。
Key Palと電子メールで交流	尾関 ozeki@intl.chubu.ac.jp	CALLメーリングリストで英語で気軽におしゃべり。また海外のペンパルと英文電子メールで文通。
オンラインでおしゃべり & 世界情報 (saMOOrai & schMOOzeプロジェクト)	尾関 ozeki@intl.chubu.ac.jp	ロールプレイングゲーム型の英語チャット。仮想日本国土や仮想大学を旅しながらであった人と英語でおしゃべり。
Japan Trivia Quiz -- 日本の片隅紹介クイズ	小栗 oguri@clc.hyper.chubu.ac.jp	日本の身近な風景・ちょっと変わったものを写真で紹介し、英語でクイズを出そう。
ネットニュースの英語表現	小栗 oguri@clc.hyper.chubu.ac.jp	ネットワークで使われる英語表現を地道に収集。
miniTheBTOで質問に答えよう	小栗 oguri@clc.hyper.chubu.ac.jp	日本の最近のできごとや、誰かに聞きたかった日本での習慣やマナーのことについて、異文化の方々から、質問を受け付けています。寄せられているトピックについて、意見や情報を返信して、応えてあげてください。
日本紹介メールマガジン	尾関 ozeki@intl.chubu.ac.jp	日本の文化や日常生活を紹介する、英文メールマガジンを週刊（またはそれ以上の頻度）で発行します。チームを作って1回分の執筆・編集をし、輪番制で休まずに発行していきます。目指せ読者1,000人！
Show and Tell	小栗 & 尾関	写真を投稿して英文で説明を添えます。海外からも投稿を募ります。文章だけではなくちゃんと説明しにくいことも、写真があるとわかりやすい！世界に見せたい自慢の品がある人、写真を撮るのが好きな人、歓迎します。
英文ホームページの作成	尾関	準備中

Shuji OZEKI, ozeki@intl.chubu.ac.jp

図2 「お好みプロジェクト」ページ

<http://www.intl.chubu.ac.jp/gaikokugo/johoEigo2000/projects.html>

学生たちはこのような課題を、授業時間内だけでなく、授業時間外にも語学メディアラボやS I ルームや自宅などで取り組んでいくことになっている。情報英語の授業を行う上でのネットワーク管理やトラブル発生時の対応などは、担当教員のみならず語学センターの技術員のスタッフにも大いに支えられて行われている。

3.2 「情報英語」における課題

ネットワーク環境が整備されていて他の大学と比較しても恵まれた環境におかれているにもかかわらず、すべてがスムーズにいったわけではない。そこで、情報英語の授業を進めていく中でどのような問題や課題があるかを考察してみたい。

学生側に関しては以下の点が考えられる。情報英語のシラバスに「ワープロの使用や電子メールの使用法などの基礎的な技能については最低限の導入教育を行うが、受講生はあらかじめコンピュータの使用経験があることが望ましい。」と唱っており、しかも1年生次に全学共通基礎科目として「情報処理入門」が開講されワープロの使用や電子メールの使用法などの基礎的な技能について習得しているはずであるが、基礎的な技能について習得していない状態で履修してきてドロップアウトしてしまう場合も多い。また、この授業はコンピュータの授業ではなく英語学習の授業であるという説明が明記されたシラバスや掲示物を読まないで履修する学生もいるため、多くの英文を読んだり書いたりすることに途中でついて行けずやめてしまう学生がいる。しかも、教師に指示されたことをするという受身的な習慣になれているので、自習をしたり自分でWWW上に書いてある説明や指示に従いながら課題をこなしていく授業形態にとまどってしまうケースもみられる。何かテーマを自分で決めて調べたり書いたりするときに、テーマを選ぶのが困難であったり、たとえ選んでも狭く絞ることができない。自分でテーマを選んでレポートを書くという経験がほとんどないため、教師側が相当具体的に例を挙げてやらないと決めるのが困難である。

教師側に関しては、非常勤講師である場合、中部大学で発行してもらった青木のアドレスに学生が電子メールで送ったレポートを自宅での個人アドレスに転送するしかけを作ってもらい、膨大な量の学生のレポートおよび相談は自宅で行なわなければならないなかったり、自分のホームページを作成したり更新するときは自宅からFTPで送らなければならないなど、負担が大きい。30数名の学生が一斉にレポートや相談を電子メールで授業中のみならず授業外にも送ってくるので、それらを読み添削したりアドバイスする教師の仕事量は相当なものがある。また、情報英語を教えるためには、一般的な英語教育的能力以外の情報英語で使用するコンピュータソフトやシステムの知識を常に習得し使いこなしていかなければならない。しかも授業中にコンピュータやネットワークなどのトラブルなどで、語学センターのシステムエンジニアの方に救援を依頼しなければならないことも生じる。

4. Eラーニングを効果的に実施していくための問題点と対応策

無論どの教育機関でも恵まれたネットワーク環境で授業が運営できるとはいえない。Eラーニングを効果的に実施するにあたり、現在なお多くの大学などが直面する問題点として以下の点が上げられる。

第一に、1クラス約30～40名の学生からなるCALL授業を一人の教師で行なったりサポートをする上で、ソフト面やハード面で教員への負担が大きい。例えば、ワープロソフトの操作方法、ブラウザの基本操作およびホームページの検索方法、電子メールの設定やメーリングリストへの投稿の仕方、ホームページの作成方法などを授業中1度の説明でわからない学生に説明したり、コンピュータの調子がよくないときなど一人の教師では手に負えないことが多い。また授業外においても、Eメールなどで一人一人の学生への相談やアドバイスなど、膨大なケアをしなければならない。

第二に、授業内および授業外におけるシステムなどのトラブルにすぐに対応する体制が整っていない場合が多い。例えば、授業中に数台のコンピュータがフリーズしたり、全員がすぐにインターネットにアクセスできなかったり、メールの設定がうまくいかなかったり、メール上での種々のトラブルなど授業内外での頻繁におこっても、学生や教員のためのサポートをしてくれる教育機関が少ないのが現状である。

第三に、学生のホームページ公開やネットニュースなどへの投稿やテルネット接続を阻む閉鎖性が見うけられる。多くの大学では、セキュリティの面から、学生の書いたホームページを外部に公開することを禁じたり、外から大学のサーバーに簡単にアクセスできないようにファイアウォールをかけてある。また、学生がネットニュースに投稿させることや、テルネットを使用しschMOOze Universityなどの仮想大学にアクセスすることができない所も多い。

第四に、教師がインターネット環境を十分に活用できるようになるために必要な教員教育体制が整っていない場合が多い。授業でインターネットを駆使した効果的な授業を計画し施行する際に、その大学にはどのようなシステムが整っており、どのような制約があるのか、備えられた機器の使用の仕方やトラブルが発生したときの対処の仕方や、コンピュータ教室にはどのようなソフトがインストールされているのか、それらのソフトを使用したらどんなことが可能なのか教員が熟知していなければならない。しかし、そのような教員教育をきちんと行っている教育機関は少ない。ほとんどが少数の専門的知識のある教員などに頼っているのが現状である。また、どのようなハードやソフトを導入したらよりよい学習を供給できるかなど教員が集まり討論するところも少ない。

これらの問題への対策としては、授業中にハードやソフトの使用に関して訓練を受けた学生授業アシスタントを2～3人つけること、システムサポートのような部門を特別に設けトラブルに対応できる人材を常時おくこと、教員と大学側とのディスカッションの場を設けること、インターネットを使用する学生たちにインターネットの不正アクセスやセキュリティなどの危険性や問

題，インターネット上の情報の見極め方などを教育する必要がある。またインターネットで情報を発信する上でのマナーや常識なども教育することにより，投稿やホームページの公開などに関して問題がないという安心感を大学側に与える必要がある。

さらに，ネットワークに詳しい人材をおく部門を常時設置するとともに，教員の教育もそこで同時に行えることが望ましい。その部門と教師の間の密なコミュニケーションやディスカッションを積み上げていくことにより，オンラインを駆使した学習環境のもとで学習者と教師や学習者同士の間でのインタラクティブな学習をより活性化させ，学習者の動機付けを高め，ソフト面ハード面からの学習者へのサポートを充実させていくことが非常に重要である。

5. 今後の課題

これからはますますIT革命が，教育分野だけでなく，金融，商業，製造業など様々な分野で世界的に起こってくる。インターネット市場調査会社のインターナショナルデータ社の予測によると，米国での情報技術分野におけるインターネットでの教育やトレーニングはめざましく成長し，2002年には55億ドルにまでなるだろうとしている。⁷⁾ より多くの人がインターネットを使いこなすようになれば，それだけ多くの人がEラーニングをすることになるであろう。実際にブリティッシュオープン大学やフェニックス大学では，1990年にはオンラインで教育を受ける学習者が1万人にも満たなかったのに，1996年には5万人に増加しているというデータがある。また，Cisco SystemsのCEO（最高経営責任者）であるJohn Chambers氏は，Eラーニングは2年半の間着実に成長した後，一気に普及するだろうと予測している。Chambers氏によると，インターネットにおける最大の成長分野で，変化の最大の動因になるであろう分野がEラーニングなのだという。⁸⁾

日本においても，森首相が2000年9月21日に衆参両院本会議でおこなった所信表明の『国民運動としてのIT革命』の中で，「IT革命の飛躍的推進を第一の柱とし，学校や公共施設の高速インターネットを整備するとともに，全国民がインターネットを使えるよう一大国民運動を展開していきたい」と，日本型IT社会を目指した「E-ジャパン」構想を掲げ，5年後には我が国を世界の情報通信の最先端国家に仕上げるという目標のもと，政府の取り組むべき最も重要な柱として推進されていくという方針が示された。⁹⁾ また冒頭でも述べたように，インターネット上での授業を遠隔地授業として認めるなど，文部省が大学関連の省令を改正する方針を決め，海外向けにインターネットで授業を公開することや，ネット上で得た外国の大学の単位を日本の大学の単位とすることが認められることとなり，インターネットだけで授業を行う「バーチャル大学」が日本でも可能になる情勢となってきた。これに伴い，Eラーニングの重要性が日本の教育現場においてもますます高まっていくであろう。

Eラーニングをより効果的に押し進めていくためには，今後の課題として，学習者と教員や学習者同士の間でのオンラインを駆使した学習環境のもとでのインタラクティブな学習をより活性

化させ、学習者の動機付けを高め、ソフト面ハード面からの学習者へのサポートをいかに充実させるかということ、また、大学内外の教員教育の充実、教員と大学側とのコミュニケーションを促進させることなどがあげられる。その上、「インフラやコンテンツの豊富なアプリケーション、リンク付けのフレームワークにとらわれない教育を受け入れる思考様式、変化に対応できる柔軟な思考」¹⁰⁾ なども必要となってくる。

真の意味でのEラーニングを実現するために、国内外の様々な大学の講義をオンラインで履修することができ、単位取得や卒業資格がとれるような制度が整えられ、誰もがいつでもどこでも迅速に安価に学習できるような環境が整えられることが重要である。今後は、大学においてだけでなく自宅でも、教師や他の学習者と電子メールや電子会議やBBSなどのオンラインで、密なコミュニケーションをとりながら学習することがますます盛んになり、生涯学習にも大きく貢献することになるだろう。それに伴い、英語教育においても、Eラーニングをより効果的に推進していくようさらに研究実践をすすめていく必要があると思われる。

注

* 本稿は、JACET（大学英語教育学会）第39回全国大会（2000年11月）での研究発表、「英語教育におけるEラーニングの実践と今後の課題」の内容に加筆および修正を加えたものである。

- 1) 島田（2000）p. 9.
- 2) 詳しくは、<http://www.asahi.com/1012/news/national12005.html> を参照。
- 3) <http://www.cisco.com/warp/public/10/wwtraning/elearning/elearning.html> より抜粋。
- 4) Tanquist（2000）参照。
- 5) 島田（2000）p. 9.
- 6) 詳しくは、<http://www.intl.chubu.ac.jp/gaikokugo/johoEigo2000/syllabus.html> を参照。
- 7) 詳しくは、http://www.astd.org/virtual_community/research/1988_learning_technologies.html を参照。
- 8) PC WEEK Online Japan (<http://www.zdnet.co.jp/pcweek/news/9911/17/99111704.html>) より抜粋。
- 9) 詳しくは、http://www.kantei.go.jp/jp/souri/2000/0921jpg_syosin.html を参照。
- 10) PC WEEK Online Japan (<http://www.zdnet.co.jp/pcweek/news/9911/17/99111704.html>) より抜粋。

参考文献

- 朝尾幸次郎 他編（1996）『インターネットと英語教育』 大修館書店
 今村洋美（1996）「インターネットを使った英語教育の進め方：電子メールの利用」『インターネットと英語教育』 大修館書店 pp.76-81.
 今村洋美（1996）「インターネットを利用したプロジェクトの紹介：中部大学での実践」『インターネットと英語教育』 大修館書店 pp. 183-185.

- 今村洋美・水野邦太郎 (2000) 「インタラクティブ・ライティング・コミュニティ(IWC)の開発と実践——英語コミュニケーション活動の促進をめざして——」『中部大学国際関係学部紀要』, 第24号, pp. 145-164.
- 尾関修治 他 (1998) 「情報英語の実践: 中部大学における英語授業とインターネット」『第37回 (1998年度) JACET全国大会要項』 pp. 87-88.
- 倉本充子 (1999) 「教育における電子ネットワーク利用の意義: 日本・韓国・台湾の現状の分析」『関西英語英米文学会』第18号 pp. 141-160.
- 島田綾子 (2000) 「2000年度米国の人材開発最新レポート」『グローバルマネージャー』Vol.2 pp. 9-10.
- 高島英幸 (1995) 「Interactive Approach (インタラクティブ・アプローチ)」『現代英語教授法総覧』大修館書店 pp. 280-295.
- 野澤和典 (1997) 「WWWプロジェクトによる共同学習と自文化理解」Call: Basics and Beyond, pp.97-104.
- 野澤和典 (1999) 「Web-based CALLプログラムの開発と実践」立命館教育科学プロジェクト研究シリーズ XI 外国語教育におけるFD研究 pp. 81-88.
- 水野邦太郎 (1998) 「インタラクティブなコミュニケーション活動を目指した英語教育」『教育』10月号 pp.112-122.
- 山内豊 (1996) 『インターネットを活用した英語授業』NTT出版
- 「第百五十回国会における森内閣総理大臣所信表明演説」
http://www.kantei.go.jp/jp/souri/2000/0921jpg_syosin.html
- 朝日新聞2000年10月12日版 (p. 1) <http://www.asahi.com/1012/news/national12005.html>
- Muehleisen, Victoria (1997) *English via the Internet: Using the Internet in University Classes*. Call: Basics and Beyond, pp. 37-40.
- Nozawa, Kazunori (1998) *The World Wide Web Projects Through Collaborative Learning*. The Ritsumeikan Economic Review (Vol.47, No.2・3・4) pp. 350-358.
- Oxford, Rebecca L. and Martha Nyikos (1997) *Interaction, Collaboration, and Cooperation: Learning Languages and Preparing Language Teachers*. The modern language journal, 81(4), pp.440-442.
- Oxford, Rebecca L. (1997) *Cooperative learning, collaborative learning, and interaction: Three communicative strands in the language classroom*. The modern language journal, 81(4), pp. 443-456.
- Rivers, W. M. (1987) *Interactive Language Teaching*. Cambridge University Press.
- Sherry, L. (1996) *Issues in Distance Learning*. International Journal of Educational Telecommunications, 1 (4), pp. 337-365.
- Tanquist, Stu (2000) *Definition of "e-Learning"*. Learning Technologies Messages. (http://www.astd.org/virtual_community/comm_learnstech/)
- PC WEEK Online Japan (<http://www.zdnet.co.jp/pcweek/news/9911/17/99111704.html>)
- http://www.astd.org/virtual_community/research/1988_learning_technologies.html